

平成30年度広島県公立高等学校入学者選抜一般学力検査の結果について

- ・平成30年3月6日（火）・7日（水）に実施した、平成30年度広島県公立高等学校入学者選抜「選抜（Ⅱ）」における一般学力検査の結果を取りまとめました。
- ・この結果については、教科指導の参考とするため、県内公立中学校及び高等学校等に配付します。

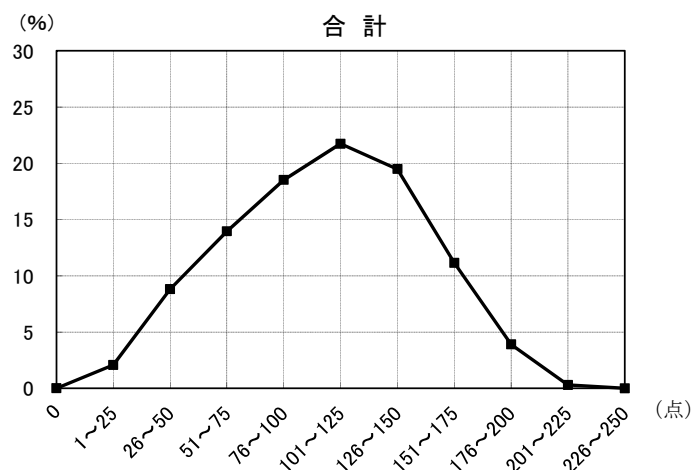
【一般学力検査結果の概要】

- 5教科の平均点は21.5点（平成29年度は19.8点）

各教科の平均点は次のとおり

教科	国語	社会	数学	理科	英語
平均点（50点満点）	23.5	18.0	22.4	19.1	24.4

- 5教科合計の得点分布は、全体の形は中央が高くなった山形で左側にややふくらみがみられ、60%を超える得点層に属する受検者は少ない。5教科に共通した課題として、日常生活などを想定した課題解決の場面で、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断したりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が見られる。



I 一般学力検査結果の概要

平成30年3月6日（火）・7日（水）に実施した広島県公立高等学校入学者選抜における一般学力検査について、その概要を取りまとめたので、今後の学習指導の参考としてください。

1 出題について

一般学力検査問題の出題に当たっては、中学校学習指導要領に示された各教科の目標に基づき、分野・領域のバランスに留意するとともに、基礎的・基本的な内容を中心に
出題した。また、総合問題や記述問題などを取り入れることによって、思考力・判断力・表現力などをみるよう配慮した。

出題の大問数等については、次のとおりである。なお、英語においては、例年どおり
実音聴取による問題を出題した。

各教科における設問数

内容	国語	社会	数学	理科	英語	合計
大問数	4	4	6	4	4	22
設問数	21	22	20	24	22	109
選択問題	4	3	3	7	10	27
記述問題等	17	19	17	17	12	82

* 記述問題等には、漢字の書き取りや選択した理由を併せて記述する設問を含めている。

2 検査結果の概要について

各教科の平均点、標準偏差及び得点分布については、次のとおりであった。

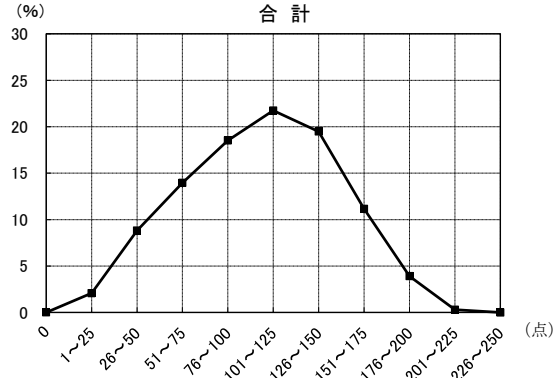
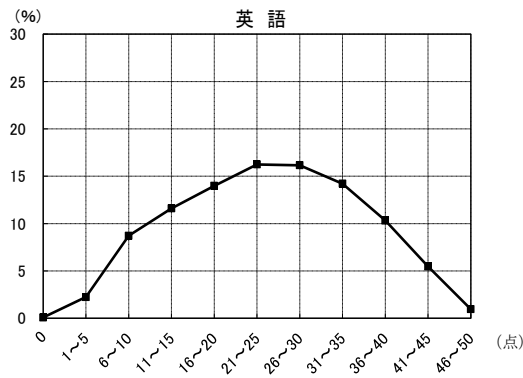
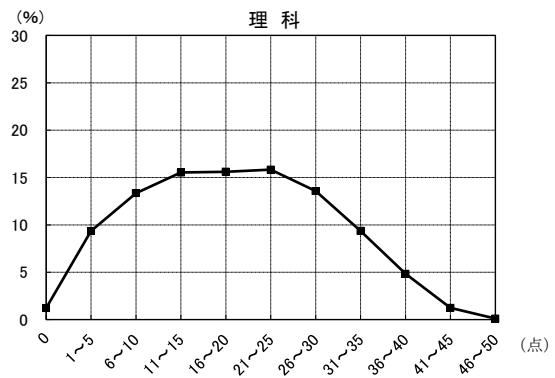
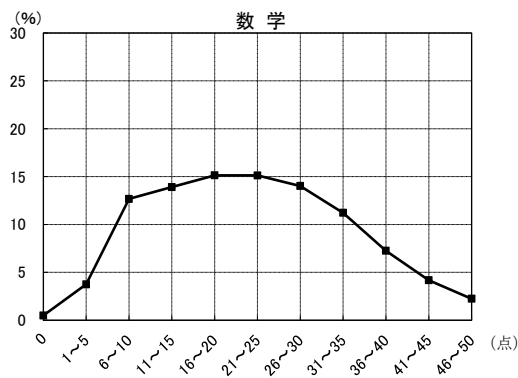
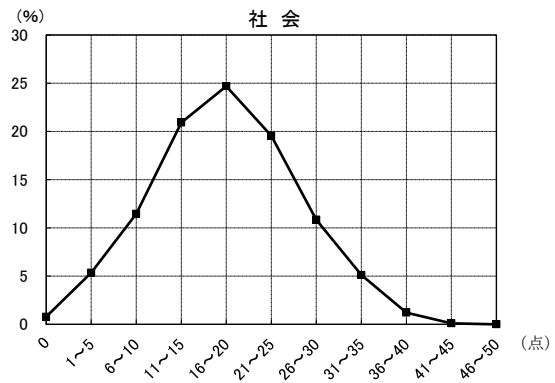
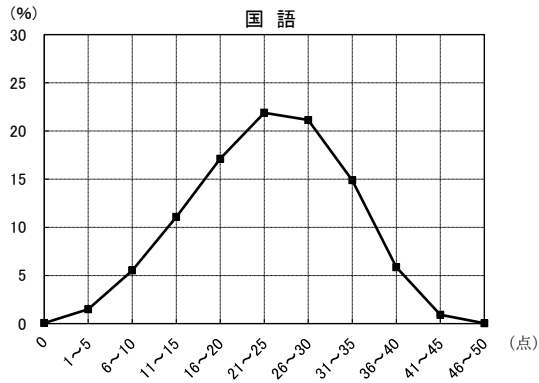
各教科（50点満点）の平均点

教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科平均
平成30年度	23.5	18.0	22.4	19.1	24.4	21.5
平成29年度	23.9	19.3	23.0	17.1	15.9	19.8

各教科（50点満点）の標準偏差

教科	国語	社会	数学	理科	英語
平成30年度	8.3	7.9	11.1	10.3	10.4
平成29年度	8.3	9.3	11.2	9.7	9.2

(各教科等の得点分布)



5教科合計の平均点は昨年と比べ上昇した。得点分布の状況を示すグラフの全体の形は中央が高くなった山形で左側にややふくらみがみられ、60%を超える得点層に属する受検者は少ない。

各教科の得点分布を比較すると、国語では、全体の中央が高くなった山形となっており、応用的な問題に十分に対応できていない受検者が多いと考えられる。社会では、全体の形が左寄りの山形、数学、理科では、全体の形がやや左寄りのなだらかな山形となっており、基礎的・基本的な学習内容の定着が不十分な受検者が多くいると考えられる。英語では、昨年度と比べると右に寄ったなだらかな山形となっているが、依然として基礎的・基本的な学習内容の定着が不十分な受検者が多くいると考えられる。

教科別にみると、国語については、昨年と比べ平均点に大きな変化はなく、昨年と同様に30%以下の得点層に属する受検者が少なくない。今後学習を進めていく上での基盤となる「漢字の読み及び書き取り」についての正答率の平均は84.8%と高い。また、分野・領域別にみると、説明的な文章についての正答率が低い傾向がみられる。

社会については、昨年と比べ平均点はやや下降した。60%を超える得点層に属する受検者が少なく、30%以下の得点層に属する受検者が全体の38.5%と多かった。また、分野・領域別にみると、歴史についての正答率が低い傾向がみられる。

数学については、昨年と比べ平均点はやや下降した。30%以下の得点層に属する受検者はやや増加し全体の30.8%と多かった。今後学習を進めていく上での基盤となる簡単な数・式の計算については正答率の平均は88.1%と高い。一方、日常生活における問題を解決する場面での数学的な思考力をみる問題の正答率は昨年度に引き続き低かった。分野・領域別にみると、関数や図形についての正答率が低い傾向がみられる。

理科については、平均点は上昇した。30%以下の得点層に属する受検者は減少したものの、全体の39.4%と依然として多かった。また、分野・領域別にみると、物理についての正答率が低い傾向がみられる。

英語については、平均点は8.5点上昇した。60%を超える得点層に属する受検者が大幅に増加した。一方、30%以下の得点層に属する受検者は大幅に減少したものの、全体の22.6%と依然として多かった。また、分野・領域別にみると、文章の概要や要点を理解し、質問に対する自分の考えが読み手に正しく伝わるように英文を書く力や、日常生活の場面において、資料を基に表現内容を工夫してコミュニケーションする能力をみる問題についての正答率が低い傾向がみられる。

5教科に共通した課題としては、日常生活などを想定した課題解決の場面で、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断をしたりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。

この点を改善するためには、まず、日常生活や自然・社会における事象の考察、また、コミュニケーションの場面などにおいて、目的や意図に応じて判断したり表現したりするのに適切な課題を設定することが重要である。そして、自分自身のこととして自分なりの考えをもち、その考えは適切か、相手に正しく伝わるかなど、課題の解決に向けて探究をさせていく必要がある。この学習指導を行う際に大切なのは、新学習指導要領にも示されているとおり、それぞれの教科の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断させていくことである。新学習指導要領及び広島版「学びの変革」アクション・プランにおける「主体的な学び」が目指すのは、各教科等の内容についての本質的な理解である。そのためには、習得・活用・探究の過程の中で、各教科における見方・考え方を働かせることで、深い学びにつなげていくことが重要である。

また、高等学校においても、各教科・科目の系統性を理解した上で、義務教育段階の指導状況や生徒の発達段階、生徒の言語能力を踏まえ、授業の構成や指導の在り方を工夫・改善していく必要がある。